

上海ジャーナリスト招聘事業＝掲載記事訳文
掲載先：東方早報 APP 版（中文：澎湃、英文：The Paper）

題：訪日随筆 | 恒大は勝ったものの、我々はJリーグから何を学ぶ必要があるのか？

東方早報－澎湃新闻记者 黄翱



写真説明：横浜日産スタジアム内に展示されているブラジルサッカースターロナルドのユニフォーム

今日（10月21日）夜18時開催されたACLの準決勝戦で、広州恒大は0：0で日本の強豪チームガンバ大阪と引き分けし、トータル得点2：1の成績で決勝戦に進出した。最近、一部の中国スーパーリーグのチームが急速に発展してきたが、国内のリーグはまだ満足できるレベルには達していない。過日、東方早報道－澎湃新聞記者（www.thepaper.cn）が、日本のJリーグ、クラブチームを訪問した。広州恒大は試合には勝ったが、中国サッカーはライバル日本から学ぶべき点が多い。

「我々は強くて、魅力的なチームを作り、地元地域の誇りとなるクラブになりたい。そして、自立的で責任のあるクラブでありたい」、「Jリーグには100年構想があり、我々の目標では、この地域に100年存在することである」と、Jリーグの強豪クラブチームである浦和レッズ社長の淵田敬三氏は東方早報－澎湃新聞の記者に語った。

1993年に発足したJリーグは、1990年代中期から「100年構想」という理念を打ち出した。この「100年構想」とは、第1に、あなたの町に、緑の芝生におおわれた広場やスポーツ施設をつくること、第2に、サッカーに限らず、あなたがやりたい競技を楽しめるスポーツクラブをつくること、第3に、「観る」「やる」「参加する」ことで、スポーツを通じて世代を超えたふれあいの輪を広げることである。22年間で、Jリーグはアジアで最も成功したプロサッカーリーグとなり、世界へ中田英寿、中村俊輔、本田圭佑などの一流選手を送り出し、同時に、日本をアジアの二流チームから一躍アジアカップ三回優勝、二回ワールドカップでベスト16に進出した世界レベルで見ても強いチームに成長させた。日本とほぼ同じ時期にサッカーのプロ化を進めてきた中国

と一体どこで差がついたのだろうか？

東方早報－澎湃新聞記者は日本滞在中、浦和レッズ社長の淵田敬三氏が語った内容を、Jリーグの各クラブチームのオフィサーに繰り返し聞くことができた。彼らは全員、誇らしく語るのは、“日本のサッカー教祖”である川淵三郎の構想に従い、Jリーグの目的は試合の成績ではなく、サッカーとスポーツが人々の一種のライフスタイルとして、各クラブチームが地元地域に根付き、100年という長い期間で、目先の利益優先ではないサッカー教育に取り込むことである。この考えは中国サッカーの鏡である。

歴史を伝承し、帰属感を養う

浦和は日本有名な「サッカーの街」である。浦和ファンの熱狂度は、アジアやその他世界各国でも有名である。それ故、浦和レッズは一時期「アジアの紅い悪魔」とも呼ばれた。駅から出た瞬間に、濃厚なサッカーの雰囲気を感じることができる。道路の両側のガードにはサッカー関係の飾りなどでいっぱいである。

浦和レッズのホームである埼玉スタジアムは2002年の日韓ワールドカップのために立てられたもので、当時日本代表は初戦でベルギーと引き分け、その後の準決勝では、ディフェンディングチャンピオンのブラジルは、1対0をトルコに勝ち、最終的には優勝となった。埼玉スタジアムの中では、この両試合の面影を彼方此方で見ることができる。



写真説明：埼玉スタジアムの入り口にはレッズを象徴する紅いバラ（愛称：Reds Rose）が植えられている。

「Jリーグ100年構想」の理念があったからこそ、各クラブチーム、スタジアムは歴史の伝承を非常に重視している。記者は、浦和レッズのホームである埼玉スタジアムと横浜マリノスの日産スタジアムを見学した際、彼方此方でクラブチームの昔から現在までの栄光を表す細かい部分を見ることができた。埼玉スタジアムの正門には、浦和レッズの象徴として紅いバラ（愛称：Reds Rose）が植えていた。選手更衣室には浦和レッズと代表選手のユニフォームが飾られている。各試合の全選手のサイン入りのポー

ルがホールに展示しており、当時の日本代表の監督であるジーコ氏を含め、階段にはそのサインが丁寧に表装されていた。



写真説明：前日本代表監督ジーコ氏などが埼玉スタジアムでのサインが丁寧に表装されている。

中国のプロリーグの“地名＋スポンサー名”のチーム命名方式と違って、日本のクラブチームはずっと“地名＋愛称”で命名されている。Ｊリーグ発足当初の１０のクラブチームの中で、前アジアカップ優勝者である横浜フリューゲルスは１９９９年に、経営不振で横浜マリノスと合併し、前ＡＣＬ優勝チームである川崎ヴェルディは２００１年に東京に移転した後は東京ヴェルディとなり、それ以外にも、ジェフユナイテッド市原や１９９４年にリーグに加入したベルマーレ平塚はそれぞれ所属地を千葉、湘南に移転したが、この２チームの場合の名称変更はそれぞれの所属の小さい町から上の行政区分に変えたのみ。それ以外のチームは地名と愛称は全部そのままである。

浦和レッズ社長の淵田敬三氏は東方早報－澎湃新聞の記者に対して、「クラブチームの歴史と地元根付いた帰属感はクラブチームの最大な財産である」と述べた。浦和レッズの内部報告資料から見ても、このクラブチームの収入部分で一番多いのは、スポンサー大企業からの「寄付」ではなく、観戦チケットや記念品の販売収入であり、これらは総収入の５０％を超えている。つまり、Ｊリーグは中国スーパーリーグにおける大企業の「寄付」ゲームではなく、正真正銘、地元地域のファンからの支持で成り立っているものである。

「サッカークラブはサポーターのものであり、会社の私物ではない」と浦和レッズ社長の淵田敬三氏が強く述べた。これはスポンサー企業が、クラブチームに対するスポンサーシップに価値がないという意味ではない。浦和レッズの主カスポンサー企業である三菱自動車に対して、サポーターの愛情が消費行動にも影響し、浦和で一番多い車は三菱自動車であるとの報道も以前されたことがある。



地元根付き、忠実なファンを育成

サポーターの支持がクラブチームの経営の柱となっているため、Jリーグの各クラブチームは、地元地域に根付くことを仕事の重点に置いている。クラブチームの成績はその次となる。

Jリーグの国際部のアシスタントチーフの大矢丈之氏は東方早報—澎湃新聞に対して、「2014年にJリーグのクラブチームが地域活動に参加した数は3,765回、その中に選手、監督、コーチ、社長が参加する活動を全て含める。クラブチーム毎に違うやり方で、例えば、川崎フロンターレは、そのチームのスター選手が“主役”となる小学校の数学教科書を作り、小学生に学問の勉強をしながらサッカーへの愛情も育成していく。鹿島市の自動車ナンバープレートは鹿島アントラーズのマスコットも入っている。浦和レッズはCSR活動として“Heart-full Club”を立ち上げ、定期的に選手を地元の小中学校に派遣し、学生と一緒にサッカーを楽しむ。」と述べた。



写真説明：明子さん普段の仕事はここに見学にした子供たちに説明をすることである。

埼玉スタジアムで我々を受け入れてくれた明子さんの普段の仕事は、見学にきた子供たちにスタジアムや浦和レッズの歴史について説明することだ。「我々は地域の誇りとなるクラブになりたい」と浦和レッズ社長の淵田敬三氏は再三、東方早報—澎湃新聞の記者に語った。

横浜マリノスのホームである日産スタジアムでも、同様にクラブチームが小さいときからサポーターを育てている証左を見ることができる。例えば、壁には、選手が子供の描いたマリノスのマスコットの絵を持っている写真を一面に飾ってある。各階ごとに子供が楽しむエリアを設置し、ハロウィンが近づき、わざわざ子供たちに「トリックオアトリックロール」などのイベントも開催している。

Jリーグの国際部のアシスタントチーフの大矢丈之氏は、「イギリススーパーリーグクラブのように、収入の90%が放送ライセンス権であるのと異なり、2014年のJリーグの収入の内訳は、放送ライセンス権38%、スポンサー料31%、会員費及び記念品販売収入21%であり、健康体質であると考える」と述べた。

クラブチームが地元地域とこのような密接な連携を保っているからこそ、日本のサポーターの忠誠度は驚くべきものがある。記者が見学した横浜マリノスとヴィッセル神戸の試合では、ゲートオープンの2時間以上前からゲートはサポーターであふれていた。人々は静かに長い列を作り、年間チケットを持っている特別ゲートのサポーターも、早々と列を並んでいた。



写真説明：横浜マリノスとヴィッセル神戸の試合前、サポーターは早々とスタジアムの外で列を並んでいる。

クラブチームの成績と関係なく、サポーターはずっと後ろで支持している。Jリーグは2002年の日韓ワールドカップのバックアップもあり、この10年の試合ごとの観客数は16,000人から19,000人を維持している。スターの影響が前より落ちている中、成績は各クラブチームの観客数に対して影響が少なく、浦和レッズの状態は日本で一番良いと言える。2006年に優勝した時の試合平均観客数は45,573人、2年後、チームはリーグで7位だが、逆に観客数は試合平均47,609人に上昇、ほぼ全て満席となった。その後、当チームは連続何年間か優勝と無縁だったが、依然として試合平

均 4 万人ぐらいの観客者数を維持している。忠実にチームをサポートする姿は、ヨーロッパのプロリーグと比較しても珍しいことである。

ここでの注目点として、各訪問先で幾度となく語られるのは、全てのサポーター組織は自発的であり、クラブチームとは直接関係のなく活動している点である。

今回の観戦した試合では、ランキング下位のヴィッセル神戸も数百人の根っからのファンが雨の中、関西から遠いアウェイの試合に駆け付け、試合開始から終了まで自分たちのチームへの応援を続けていた。ヴィッセル神戸は 10 人对 11 人とビハインドの試合の中で、試合終了の 1 分前に相手にゴールされ惜しくも敗れた。

一線チームへの巨額な投入は、短時間でスター集団のチームが作れるが、セカンドチームの訓練体制の整備と絶え間ない人材の育成はできない。現在 Jリーグのクラブチームの ACL での成績は良くないが、その一つ大きな理由として、日本のトップレベルの選手の多くがヨーロッパの 5 大リーグで活躍している点に起因している。浦和レッズの淵田敬三社長は、「クラブチームの発展の為に、二つの運営費に短期的な見返りを求めず、投入すべきものがある。一つは女性チームの建設、一つはサッカー学校の建設である。昨年、この二つの経費は 1.8 億円（952 万円）を及んだ。」と語った。

セカンドチームの建設は Jリーグの必須指標であり、多くのクラブチームはセカンドチーム建設に高額の投資をしている。

Jリーグの国際部のアシスタントチーフの大矢丈之氏は、「今後 Jリーグの仕事の重心は、さらにスポーツ選手のキャリアデザインに移る。そのため、専門のトレーニングコースを作り、選手引退後に、第二の職業を選択する際に役に立てるようにする。」と述べた。

標準化されかつ厳しい審査制度

話題を Jリーグ本体に戻し、Jリーグはアジアで最も成功したプロサッカーリーグである。試合のレベルが高いのみではなく、リーグのシステムの完備や公正な試合環境にも関係がある。これは Jリーグの最も厳しいライセンス制度に起因している。2012 年に Jリーグは“クラブライセンス制度”をスタートさせ、クラブの競技、施設、人事、法務及び財務など 5ジャンル 56 項目に対し、厳しい規定を設定した。特に財務指標と法務指標の全ての項目は Aランクに達しなければいけない。例えば、クラブチームが 3 年連続赤字であれば、そのライセンスは取り消される。何年間前に、中国スーパーリーグで頻繁に発生した選手への給料滞納問題の大きな要因は、クラブの財務状況への審査が緩すぎる点にある。このようなことは財務審査の厳しい Jリーグでは起こりにくい。法務指標はクラブが義務的に守るべき競技規則、Jリーグ規則などがあり、同様に一発アウトの感覚で、この分野において何等かの違反があった場合、チームの成績問わず、

そのままライセンスが取り消される。それに加え、Ｊリーグの審判費用は殆どリーグに独立したＪＦＡが負担し、審判の給料も普通の選手より高い。中国スーパーリーグで発生した、先日のスキャンダルは、発足から 22 年のＪリーグには一度も発生していない。

現在、Ｊリーグはさらなる厳しい審査制度を導入しようとしている。その中の競技指標には学園の完備（セカンドの育成）、地元地域での新しい体育場建設などの課題も盛り込む予定である。これにより、クラブチームが地元地域でサッカー教育を広め、スポーツの面において確実な措置を取るよう促進する意味がある。

今年の年初、中国サッカー協会も段階的にライセンス審査制度を導入しつつあり、国内の八百長、給料滞納問題を解決しようとしている。

Ｊリーグの国際部のアシスタントチーフの大矢丈之氏は東方早報－澎湃新聞の記者に対して、「上海上港チームが来年のACL出場できることを期待している。経済広報センターと上海市人民对外友好協会を窓口にして、ACLの試合は別にしても、スポーツを通じた日本・中国間の民間友好交流を進めて行きたい」と語った。

以上

*本文の記事・写真は、新聞社、執筆者からの許可を得て翻訳の上掲載しています。

翻訳文責：国際広報部主任研究員 藤原慎二